森からのお手紙

10号
2022

Topics

森のこよみ
お客様物語　村上由見子さん

お一人おひとりの人生が異なるように、お墓の選び方も実にさまざま。

その想いや考えを、お届けします。

お客様物語 第10回

今回のお客様　村上 由見子 さん

森の墓苑がある千葉県長南町から車で30～40分、長生村にお住まいの村上由見子さん。五人姉妹の五女で墓じまいをする立場にありました。今年の夏、森の墓苑の個別墓の区画にお父様とお姉様お二人のご遺骨の改葬とお母様の納骨を一緒にされました。

もともと家族で東京都杉並区に住んでいましたが、ご両親が70歳くらいの時に老後を過ごす場所として、海のある長生村を選びました。95歳まではお二人で元気に過ごされていましたが、お母様の転倒をきっかけに11年前から村上さんも一緒に長生村に住みはじめました。お父様は97歳で亡くなられ、お母様は昨年106歳で亡くなられました。昨年のお正月にはおせち料理も召し上がり、亡くなる2ヶ月前まではお元気に過ごされていたそうです。

かねてより樹木葬を希望していたので、お母さまとのお別れがきっかけで真剣に探し、昨年11月の見学会に参加しました。「クネクネとした山の中の道を車で走って行く里山風景がのどかでとても素敵で…心が洗われるようでした。墓苑の高台から眺めた山々に改めて『いい所だな』と」

他で見てきた樹木葬には、なかなか心が動きませんでした。「流行っているからやっている感じや商売っ気を感じて。またお墓も人工的な感じを受けました。ここは山に戻すことを目的に土地を確保し、『いずれ森にかえる』という大きな志があって、ほかとの違いを感じました」

12月の見学会で、お姉様ご夫妻も一緒に参加、同じ区画に8人まで入れることもあり「(自分たちも)ここに決めた」というほど気に入られたそうです。また、猫のリボンちゃん(メス)を飼っている村上さんにとって、愛猫と一緒に入れるというのも大きな理由に。「一つひとつ懸念がクリアされていった感じ」で、今年の春に来苑されて区画を決め、ご契約に至りました。

ご納骨は夏。秋の見学会から冬、春と、全ての季節の墓苑を見たことになります。「お花がたくさんという場所ではないけれど、それは望むところではないんです。緑が多いだけで安心するし、冬枯れも素敵。四季折々で命の循環を感じられますね」

「スタッフの方がお骨をさらしに移してくださる時、扱いがとても丁寧で本当にここに決めてよかったと思いました。遺族も参加してきちんと納骨できた、という気持ちになりました」

墓じまいをする立場にあった村上さん、今は「大きな問題を解決した、責任が果たせてほっとした」と安堵に包まれているそうです。

森の墓苑
自然のなかに眠り森を育てる

(公財)日本生態系協会　森の墓苑東京事務所
東京都豊島区西池袋2-30-20音羽ビル
電話 0120-901-580 (9:00～18:00)　HP www.morinoboen.org

森からのお手紙　10号 2022　発行：(公財)日本生態系協会

◆**見学やお墓参りについて**◆ ご来苑の際は、スタッフ不在の場合がありますので、前日までにご連絡ください。開苑時間10～16時 月曜定休（祝祭日を除く）。スマートフォンのアプリ「LINE」のビデオ通話を使用した現地見学も承ります。

◆**出張説明**◆ ご自宅や団体・企業での説明会も承りますので、ご依頼ください。

秋の虫たちの音色

「虫聴き会2022」

地元の方々を中心にご参加いただいた虫聴き会では、事前に捕獲した秋の虫たちで「鳴き声」の聴き分け方をレクチャー。月明かりのもと、散策ではコオロギやキリギリスなど「秋の音色」に耳を傾けるひと時を楽しみました。ご契約者さまをはじめ地域の方々と積極的に森や草はらをつくり、鳴く虫や生きものを呼び戻す環境づくりをすすめてきた成果です。

ふるさと納税返礼品

地元長南町へのふるさと納税返礼品として、昨年「合葬墓こなら」に続き、今年8月には「新・合葬墓たんぽぽ」も採用されました。長南町への50万円以上のふるさと納税に対して、永代使用権が与えられます。

◆年末年始2022年12月29日（木）～2023年1月3日（火）は、毎日開苑しています。

森のこよみ

房総の森にかけ足で秋がやってきました。ケヤキは鮮やかな黄色や橙色に、カエデやニシキギの仲間は美しい赤色に染まりました。夏に元気な緑の葉をつけていた草木たちは、色とりどりの実を付け、まもなく生きものたちは冬に備え隠れ家探しをはじめます。

八千の草はらで、絶滅危惧種 カヤコオロギ見つかる

森の墓苑では、環境活動に携わる企業や学生の方々との研修で、生きものの生息調査を行っています。今回その調査で「カヤコオロギ」という、千葉県では絶滅危惧種の昆虫が見つかりました。発見場所は、八千（やち）の草はらと呼ばれる、当協会の理事として支援いただいた八千草薫さんにちなんで名付けられた草はらです。イネ科の草はらを好むこの昆虫にも居心地の良い環境だったのかもしれません。これからも八千草さんの自然に対する想いを、しっかりと次の世代へ伝えていきたいと思います。